

校長室だより

春日 (しゅんじつ)

校長 清武 直人

あじさい
紫陽花

真っ白な
気球のような
紫陽花の花の中を
そっと覗いてみた
白い花弁に囲まれて
うす水色の
小さなつぼみが眠っていた



2014. 6. 14

「春秋」から (西日本新聞)

少年の家は貧しかった。人並みに食事をしたい。遠足に行きたい。体操服を着たい。願ってもかなわなかった。怒りや悔しさからけんかを繰り返していた。

中学2年生の時、自転車を盗んだと疑われて、警察へ連れて行かれた。無実を信じてくれるのは両親だけだった。家庭裁判所に呼び出された日、父はひたすら謝り、少年は隣でふてくされていた。

帰り道、食堂に入った。父親は小銭をかき集めてラーメンを1杯頼んだ。初めて食べるラーメン。「うまい」とかき込む少年を満足げに見た父親は、丼に残ったスープに水を注いで飲み干した。

少年は気づいて愕然とした。父親も空腹だったのだ。だが、ラーメンを2杯注文すると帰りのバス代がなくなる。バス停に向かう父親の背中に少年は誓った。

「二度と親に頭を下げさせることはしない。立派になって両親を幸せにしてやる」



1万年堂出版の「親の心」から引用してこのお話が紹介されていました。この少年は、後にボクシングで世界チャンピオンになったガッツ石松さんです。

この記事を読みながら、ふと15年前になくなった父のことを思い出しました。

父

青年は、将来の展望を持ってないままに大学を卒業した。収入も安定しない職業に就き、その日暮らのような生活が始まった。

仕事で京都に出向いた時には、財布の中が底をついた。東京に戻る交通費はない。今日の晩飯を食うのがやっとだった。自分で決めた人生だから、決して親には頼るまいと思ってきたが、万事休す。

母親には言えない。心配するに決まっている。青年は、父親に電話した。

「申し訳ない。いくらでもいいからお金を少し送ってほしい」

父親は、だらしない青年の暮らしぶりを責めることはなかった。理由も聞かなかった。父親は、その日のうちに、馬鹿息子の口座に5万円振り込んだ。

青年は、情けなくて、こぼれる涙を見られないように、京都の町を一人歩いた。そして青年は、二度と両親に心配かけまいと、人生をやり直すことを誓った。



青年は、その後勉強をやり直し、小学校の教員になりました。教員になっても、思いつきで突っ走る危なっかしい性格は改まってはいませんでした。今では、何とか校長という仕事に就かせていただいています。

15年前になくなった父は、そのことを知らぬまま墓に眠っています。

